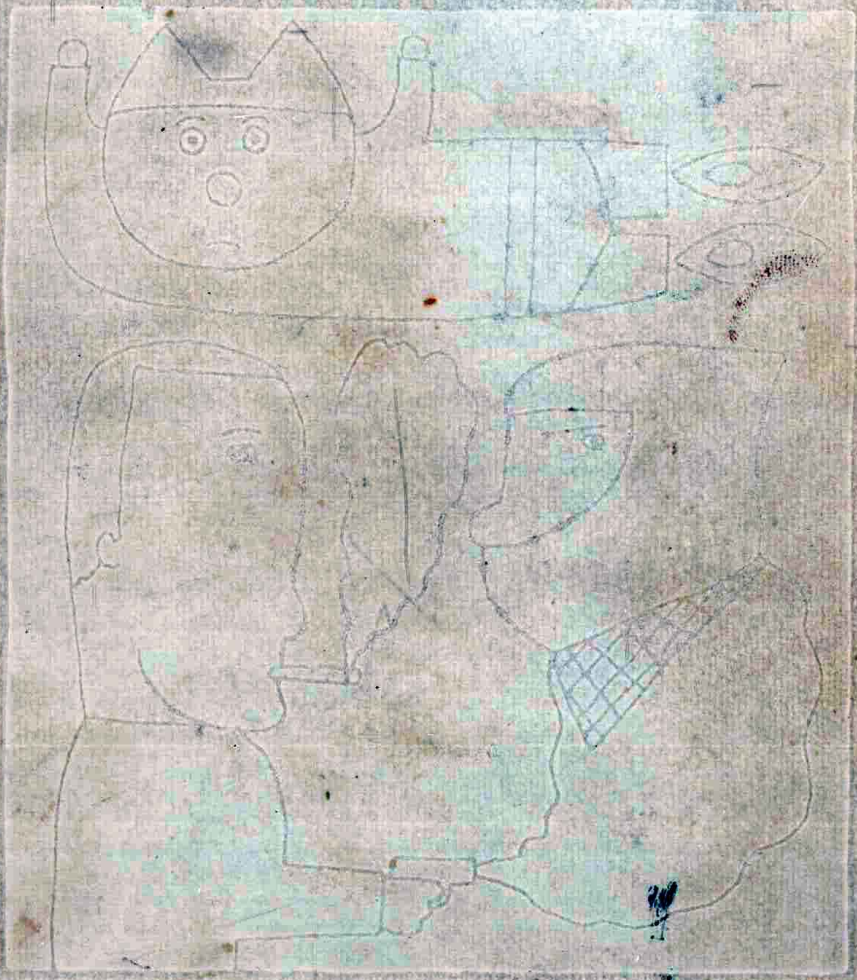
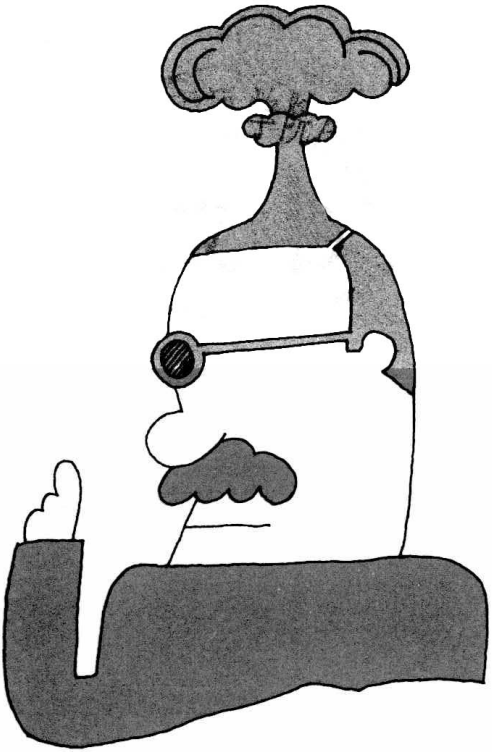
にっぽんばなし



和田 誠



講談社

にっぽんほら話

昭和四九年十二月二十日第一刷発行

著者——和田誠

発行者——野間省一　発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—十二—二一　郵便番号一一二

電話〇三—九四五—一一一一　振替東京三九三〇

印刷所——図書印刷株式会社　製本所——藤沢製本株式会社

●—定価はカバーに表示してあります

●—落丁本・乱本はおとりかえします（企）

©MAKOTO WADA　Printed in Japan

にっぽんほら話●もくじ

にっぽんほら話 7
悪夢 21
変装 26
サウンド・オブ・ミュージック 28
うちのニャロメ 35
抵抗 40
食卓 48
第三の忍者 50
サイエンス・フィクション 61
恐竜の声 66
月日のたつのは 78
太郎とキツネ 83
うははのへ 102

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ポケットに砂と雪 118
おじさんのプレゼント 126
ロボット 145
亡霊 150
魔法のランプ 156
空海の柩 160
ブルース 173
非情のガンマン 180
おさる日記 184
シノプシス 196
松尾芭蕉の大予言 199
蛇足・または解説のようなもの 210

●装画　和田　誠
●ブック・デザイン　矢吹申彦

にっぽんほら話

にっぽんほら話

イラストレーション　永田力

妻が三面鏡に向ってなにやらパタパタやっている。ちえっ、日曜に限ってあいつは先に起きるんだ。普段の日にきちんと起きて、送り出してくれさえすりゃあ、俺はあんなにあたふたと会社へ駈け込む必要はないのに。

新婚当時はそうじゃなかった。俺がタイムレコーダーの恐ろしさをまず説明しておいたからだ。

「あの機械は強烈なんだぜ、タイムカードを差し込むだろ。間にあえばいい、でも一秒でも九時を過ぎてみろ、バネ仕掛で、ほら、拳闘のグローブあるだろ、あいつが飛び出してきてアッパーカットを喰らわすんだ。ものすごいパンチだぜ、もちろん床にのびちまう。

そしたら人事部長がやってきてカウントをとる。十かぞえるうちに起き上がればよし、だめならボーナスはたちまち半分になる」

妻はそんな話でも信じてしまう。で、言った。

「あら、コワイ会社なのね。あなたの勤め先は」

「うちだけじゃないさ、きょう日はみんなそうなってる。株式会社ならね」

俺はそんなふうに教えておいた。

一年ほどたってから、この話はバレた。妻が俺の同僚の奥さんに、おたくのご主人もよくタイムレコーダーになぐられるんですか、と聞いたからだ。そのせいか、あるいは年月がたって妻の座にでんと落ちついたためか知らないが、朝は俺が先に起きるようになった。まごまごしてると妻の寝ているうちに出かけなきゃならぬ。それなのに日曜に限って……。

でも今日は文句は言わずにおこう。弱味がある。きのうは結婚記念日なのに、すっかり忘れていたからだ。八年もたてば男なら忘れて当然と俺は思う。まてよ、七年だったかな。

俺の起き上る気配を察して、妻は鏡に向きっぱなしで言った。

「約束はどうしたのよ」

「約束って？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

俺はあわてる。約束なんぞした憶えはない。
「今年はグアム島に連れてってくれるって言ったじゃない」
ああそうか、そんなことも言ったっけ。でもね、と俺は頑張る。
「グアム島ってのはつまらないってさ、なにしろチューインガムしかない島だから」
「チューインガム？」
「そうさ、島中がガムだらけだ」
「あら、だからガム島って言うの」
「うん。ガムの木だらけ。島民はもちろん、観光客も一日中チューインガムを噛まされる。それが奴らの主食だから」
「へえ、チューインガムって木でとれるの」
「当り前だ。ゴムはゴムの木からとる。ガムはガムの木からとる」
妻はちょうど髪の毛を束ねて輪ゴムでとめているところだった。
「それで思い出した、輪ゴムはどうやって作るか知ってるか」
「知らない」
「普通のゴムはどうする？」

「知らない」
「何にも知らないんだな。ゴムの木があるだろ、その木の幹にナイフで傷をつける。傷口から汁がにじみ出してくる。それがゴムさ」
「そおお、それで輪ゴムは？」
「輪ゴムは簡単、木の幹を一周するように、ぐるりと傷をつける。ゴムの汁が出てきてそのまま輪ゴムになるのさ」
「あら本当？」
「輪ゴムにも大きいのと小さいのとあるだろ、幹の太いので作ると大きくなるし、細いので作ると小さいのになる。そういう道理だ」
少し間があってから妻が反撃した。
「でもへんね、木のぐるりにできるのなら、どうやって持ってくるの？　抜けないじゃない。下は地面だし、上には枝もあるし、葉っぱもあるし」
「女は科学的でないから困るよな。ゴムの特徴って何だ。のびちぢみすることじゃないか。輪ゴムはのばせば広くなるから、どんなに葉っぱが茂っててもへっちゃらで、広くひっぱって抜きゃあいいのさ」

妻はやっとこっちを向いた。
「あなたって色んなことを知ってるのね」
「そうさ、尊敬しろよ」
「でも、うそも言うわ」
「うそなんか言ったこたないぞ」
「あら、いつかマカロニの穴でスパゲッティを作るって言ったじゃない、その話をしたらおとなりの奥さんに笑われちゃったわよ」
「冗談じゃない、となりのバアさんに何がわかる」
妻はまた鏡に向って口紅を塗り出した。俺は言った。
「何だって口紅なんぞ塗るんだ。出かけるのか」
「出かけないけど、これは身だしなみよ」
「危険だぞ」
「何が」
「口紅つけてもいずれふき取るだろ」
「ええ」

「その時にくちびるの色素を口紅がもってっちゃうんだぞ」
「あらうそよ」
「うそじゃない、それが証拠にはだ、ふだん口紅べったりつけて厚化粧してる女が、たまに化粧しない時を見てみろよ、まるで違う顔になるだろ」
「そりゃそうね」
「特にくちびるを見ろよ、色なんぞなくなっちゃってる」
「そうかしら」
「うん。みんな口紅が人間本来のくちびるの色を奪っちゃうんだ。鏡だってコワイぞ、特に三面鏡は」
「どうして」
「鏡は命をすいとるんだ」
「迷信よ、そんなことあるもんですか」
「ところが大ありだ。テレビだってあんまりそばで見てると目がつかれることはもちろんからだにもよくないって言う」
「それは知ってるけど」

「鏡って何だ、ただのガラスじゃないか、それなのに人間がきれいに映るのはどういうわけか知ってるのか」
「知らないわよ」
「あれはガラスに特別の薬品を塗ってあるんだ。だから鏡をみるたんびに薬品が霧みたいにただよってくる。それを知らずに吸い込むだろ、だんだん身体が弱ってくる」
「鏡で病気になったなんてきいたことないわ」
「それはみんなが原因を知らないからさ、ほかの原因だと思ってるんだ。それに特に三面鏡は危いぞ」
「どうしてよ」
「鏡の中にいっぱい自分が映るだろ。奥へ奥へとキリなく映ったりするだろ。自分の影の一人一人が鏡の毒を吸い込む」
「鏡の中の人まで吸い込むの？」
「当り前さ。生きてるんだ。ほら動いた」
「だってあれは私だもの」
「そうだろ。でも結局お前は一人だ。だから鏡の中の連中が吸った毒を一身にしょっちゃ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com